

良寛と子ども

教育学部教育学科 久戸 瀬 弘 法

はじめに

良寛和尚が若い時に修行したお寺は、備中の国玉島（現：岡山県倉敷市玉島）の円通寺（正式には曹洞宗補陀洛山圓通禪寺）である。円通寺は玉島の南西部、玉島港脇の白華山^{はっかざん}にある。本堂・道場（白雲閣）近くに良寛たち修行僧が寝起きした衆寮は、今は良寛堂と名付けられている。また、良寛記念館もあり良寛の遺墨などが展示されている。良寛堂の前には、錫杖と鉢の子を手にするやさしい顔の「玉島の良寛」像がある。

境内に、売店や休憩所があり、その前に「円通寺に來たりしより幾度か冬春を経たる…」ではじまる良寛の漢詩の石碑がある。この詩の原蹟も良寛記念館で観ることができる。山頂には「童と良寛」の石像がある。

現在、円通寺は良寛修行地として岡山県史跡に、一帯は円通寺公園として岡山県名勝地に指定されている。ツツジや桜が多く植えられていて、特に春には訪れる人が多い。公園からの眺望はよく、源平合戦のあった水島灘や、瀬戸内有数の工業地帯である水島コンビナートがすぐ眼下に眺められる。遠くには、瀬戸大橋も望むことができる。

私は、円通寺とはわずか5 Kmほどの所に住んでいる。子どもの頃から円通寺には何回となく行ったこともあり、「良寛さん」の名前は早くから知っていた。良寛さんのイメージは、“子どもと遊ぶやさしいお坊さん”である。そのや

さしいお坊さんは、どんな児童観の持ち主であつたのか、子どもとの遊びの中に教育的意図があつたのか、なかつたのか。それを研究するのがこの卒業論文のテーマである。

研究方法は、良寛に関する文献にできるだけ多く当たって、それを研究するという方法に依つた。

第1章 修業時代

第1節 良寛の生涯

良寛は、1758（宝暦8）年に越後出雲崎（現：新潟県三島郡出雲崎町^{さんとうぐん}）の名主の子として生まれる。ただし、生年は記録に残るものではなく、亡くなった年から逆算したものである。宝暦7年生まれとする研究家もいる。18歳で家を出、22歳の時に隣町尼瀬の光照寺を訪れていた玉島円通寺住職の国仙和尚の弟子となり、玉島に随行して円通寺に入る。1779（安永8）年11月のことである。

以来、1791（寛政3）年3月、師の国仙が亡くなり、諸国行脚の旅に出るまでの足かけ12年間に円通寺で修行している。円通寺を出た後、越後に帰郷する1796（寛政8）年までの数年間の良寛の足どりは、全くと言ってよいほどわからない。わずかに近藤万丈という人が、土佐の国（現：高知県）で良寛に逢つたという記録を残しているだけである。

39歳頃、越後に帰郷した良寛は、生家には立

ち寄らず、空いている小屋などを転々としながら、10年近く托鉢修行を続け、48歳の1805（文化2）年に国上山の五合庵^{くがみやま}⁽¹⁾に入り、1816（文化13）年まで定住している。五合庵には、その前1797（40歳）～1802年（45歳）にも住んだことがあり、通算では約18年間という長い歳月をここで過ごしたと言われている。

そして、59歳の1816年に、ふもとの乙子神社^{おとこ}の境内にある草庵（乙子庵）に移り、69歳までの約10年を暮らしている。その後、島崎（出雲崎の北東約8 Km）の木村家の木小屋へ移り住み、1831（天保2）年1月6日、74歳で入寂するまで暮らすのである。

第2節 生い立ち

良寛は、越後出雲崎で何百年も続く名家・橘屋山本家の長男として生まれている。きょうだいは、弟三人、妹三人の七人きょうだいである。生家の橘屋山本家は、代々名主を務める傍ら、近くの石井神社の神主も兼務するという名門の家柄である。

母の名は「おのぶ」と言い、親戚の佐渡相川の橘屋山本家から16歳で出雲崎の橘屋山本家に養女として入っている。母の名については「秀子」説を採る研究家も多い。いずれにしても、良寛の母は、賢夫人でしかも優しい人であったと言われている。

父の名は「新之助」であるが、俳号の「以南」の方が世に知られていると、どの研究家も述べている。以南は三島郡与板町の新木家から20歳で橘屋に婿養子として入り、おのぶと結婚している。以南は、俳号の方が有名になるほど、家業よりも俳句に親しんだ人である。また達筆の書も残している。

良寛は、幼名を「栄蔵」、のち15、6歳頃元服して「文孝」と言った。12歳の頃から大森子陽という儒学者につき、約6年間この塾に学んでいる。

塾の友人に、地藏堂町の大庄屋・富取之則、真木山の庄屋の子で、医師になった原田鶴斎、与板の豪商の弟・左市、溝村の庄屋笹川久之助、橘崑崙の兄の橘彦山などがいるが、いずれも地方の名家の子弟である。この人たちが、後に良寛を経済的に援助するなど、深いかわりをもつことになるのである。

少年時代の良寛は、大変な読書好きであったらしく、自らも後年、「一に思う少年の時 書を読んで空堂に在り 燈火しばしば油を添えども 未だ厭わざりき冬夜の長きを」と少年時代を回想する詩を残している。

18歳になった良寛は、父の意向で塾を辞め、名主見習いになるが、バカ正直なところもあり、行政的な仕事には向かなかったようである。

第3節 修行

18歳の時に、良寛は突然家出をする。名主見習いは数ヶ月しかしなかったのである。

この家出から出家・得度までの良寛の動向については、三通りの説がある。一つめは18歳で家を出て、すぐ光照寺に入り光照寺の玄乗破了和尚によって剃髪・得度したとするもの。二つめは18歳で光照寺に入り剃髪して禅の修行に励んだが、出家はせず、正式に出家・得度したのは22歳の時、光照寺を訪れた玉島円通寺の大忍国仙和尚によるとするもの。三つ目は18歳で家を出て諸国を放浪した後に、光照寺に来ていた国仙和尚を訪ねて出家・得度したとするものである。

後に、良寛自身が「少年父を捨てて他国に奔る…」や「家は荒村に在りて半ば壁も無く展転として庸賃しつつ且く時を過ごす…」と詠っており、すぐ光照寺に入ったのであれば、“他国に奔る”とか“庸賃しつつ”とは詠わないであろうことから、私は三番目の説がより真実に近いのではないかと考えている。

また、家出および出家の理由については、よ

くわからないというのが真相のようである。よくわからないだけに、理由として、世俗的でない本人の性格、家運の衰微、父に嫌われ良寛も父を嫌った（継父説）、家業を疎かにして俳句に熱中する父への反発、橘屋対町年寄り敦賀屋・尼瀬の名主京屋との抗争、あるいは、佐渡金山に送られ短命で終わる坑夫や遊女のありさまを見聞きして“人生とは”の疑問を感じた等々、さまざまに推測されている。

松本市壽氏は、「斜陽の名家を背負い失地回復の方法を見出すこともできないまま、その一方で俳諧にのめり込み憂鬱に耽っていた父以南の癩性癰^{かんしょうへき}に対し、内向性の息子栄蔵の反発が表面化して家出・出奔につながったと見るべきである。いきなり光照寺に向かったというよりもしばらくたってから結果として光照寺に帰属したのである。⁽²⁾」と、良寛の家出の理由と、家出後すぐに出家したのではないということ述べておられる。

私もほぼ同様に考える。当時、尼瀬（隣町）の名主京屋の隆盛に押され、また配下たる町年寄り敦賀屋の反発もあり、良寛の生家橘屋は斜陽の一途をたどっていた。文弱で処世の不得手な良寛は、京屋や敦賀屋との醜い対立、町名主の権威で敦賀屋を押さえつけようとする汚い父の態度を目の当たりにしてそれに耐えられず、また今後もそういったことは自分にはやって行けそうにもないと、思い詰めて家出をしたのではないか。そして、家出後しばらく放浪する中で出家を決意したと思うのである。

私が後の良寛から想像する出家の理由は、“人生とは”“人の幸せとは”との疑問、その答えを求めてのことだったのではないかということである。根拠のない想像ではあるが、そう考えると、前述の家出後の放浪説も、禅宗の一つである曹洞宗を選んだことも、その後の彼の生活態度、すなわちこれから述べる、玉島での修行に実に真摯に取り組んだこと、寺持ちの住職に

ならず終生托鉢で衣食を得ながら草庵に暮らし、たこと、『正法眼蔵』の「四摂法」を体現しようとする生き方をしたことも、すべてが無理なく自然に理解できるのである。

さて、光照寺で国仙和尚によって、受戒・得度した文孝青年は、ここで初めて、僧名良寛（号は大愚）と名乗るのである。

「大愚良寛」という法号は彼自身が付けたとする説と、国仙和尚が与えたという説があるが、私は、後に述べる国仙から受けた「印可の偈文」などからみて、国仙が名付けたのであろうと考えている。

円通寺は禅宗の一派である曹洞宗のお寺である。臨済宗が公案を主とするのに対して、こちらは只管打坐を説く宗派である⁽³⁾。いずれにしても禅宗の修行は厳しいものである。その日常は、朝3時、振鈴を合図に起床、急いで布団を上げ、用足を済ませてすぐに暁天座禅、その後本堂で読経をしてから、6時に朝食。朝食は薄いお粥と漬け物。それから作務といわれる労働。「禅寺では『一に作務、二に座禅、三に看経』とまでいわれ、作務＝労働が重視される。⁽⁴⁾」それから11時に昼食。昼食は麦飯にみそ汁と漬け物。夕食はオジヤを午後4時頃に摂る。生活は自給自足が原則で、掃除・洗濯・薪割り・水くみ・野菜作りと、何でも自分でやらなければならない。食が尽きれば托鉢で調達する。さらに、当時の円通寺は、数ある曹洞宗の寺院の中でも規律が厳しいことで知られていたということである⁽⁵⁾。

後に良寛が、円通寺での苦しい修行を回想した詩がある。「憶う円通に在し時 常に吾が道の孤なるを嘆ぜしことを 柴を搬んでほう公を懐い 碓を踏んでも老廬を思う 入室あえて後るるにあらす 晩参毎に徒に先んず」。“孤独に耐えて修行した。作務の時は、それぞれの仕事にちなむ中国の高僧のことを思いながら頑張った。教室に入るのは仲間に後れをとることなく

一番先に入って熱心に勉強した。”このような意味であろうかと思う。円通寺において、良寛がいかにまじめに熱心に修行したかが窺える詩である。

修行すること11年、1790（寛政2）年良寛33歳の年に、国仙和尚から「印可の偈」を授けられる。今でいう卒業証書である。それは「良也如愚道轉寛 騰騰任運得誰看 為附山形爛藤杖至処壁間午睡閑」というものである。ここに、騰騰任運（とうとうにんうん）という語が見える。騰騰とは「自由にのびのびと行動する。ものにこだわらず自由であること」である⁽⁶⁾。任運とは、人にはそれぞれその人にふさわしい生き方がある。その生き方は持って生まれた性格やその後の環境によって作られたものである。それが自然の成り行きであり運である。その運に任せて、つまり“自然法爾に＝自然の摂理に従って”自分自身にふさわしい生き方の中で精一杯頑張っていることが“任運”である。決して自己の主体性を放棄して、“成り行き任せ”や“運を天に任せる”ような生き方ではない⁽⁷⁾。

国仙和尚も「印可の偈」で、“良寛よ、お前は一見愚かに見えるが、それはお前の自然の姿であり、お前にふさわしい生き方なのだ。自由にのびのびとお前はお前らしい人生を生きて行きなさい”そう言って良寛を励ましたのだと思う。良寛はその言葉にどれほど励まされ、勇気づけられたことであろうか。

ちなみに、玉島円通寺の良寛堂の案内板に「…騰騰任運の特色ある良寛禅の境地はこの地で生まれた」と書かれている。後述するが良寛の後半生の生き方はまさに“騰々任運”である。良寛はこの「印可の偈文」を終生肌身離さず大切にしていたと言われている。

さて、この円通寺修行で忘れてはならない最も大事なことは、良寛がこの円通寺において、道元の著した『正法眼蔵』と出会うことである。師の国仙から講義を受け、また良寛自らが『正

法眼蔵』を読むことも許されたという。そして『正法眼蔵』が、それからの良寛をつくっていったと言えるのである。

第2章 良寛の人柄・生き方

第1節 四摂法

良寛が何よりも尊んだとされている『正法眼蔵』の巻45に、「四摂法」というものがある⁽¹⁾。四摂法とは、「心身をととのえるための四種類の修行法」である⁽²⁾。それは、「(一) 布施・(二) 愛語・(三) 利行・(四) 同事」の四つである。西嶋和夫著『現代語訳正法眼蔵』によると、「一は与えること、二はやさしい言葉、三は他のために尽すこと、四は協調」である⁽³⁾。

「与えるということはむさばらないことである。〈そして〉むさばらないということは、欲張らないということである。〈そしてさらに〉欲張らないということは、世間一般でいうように、打算的な利益に執着しないということである。仮に全世界を統一し支配するような〈力量の〉人であっても、正しい教えを人に施す場合には、むさばらないという事態が必ず随伴するのである。〈しかもそのむさばらないという事態のありさまは、〉ちょうど捨てる筈の財貨を、見ず知らずの人に呉れてやるときのように〈にきわめて恬淡としたもの〉である。…一つの言葉、一つの詩句といったような教えでも、人に与えるべきであり、〈それが〉現在の生活、現在以外の生活における幸福のよい原因となるのである。」

「やさしい言葉というのは、人々を見るに当たってまずいつくしみの心を起こし、おもしろい言葉を与えることである。〈いい変えれば〉何事によらず、乱暴粗悪な言葉を使わないことである。…面と向い合った形でやさしい言葉をきく場合には、自然と顔もほころび、心を楽しくさせる。〈また〉面と向い合わない形で、〈人

づてに) やさしい言葉を聞く場合には、肝に刻みつけ魂に刻みつける〈程の影響がある〉。銘記せよ。やさしい言葉というものは、やさしい心から起こるのであり、やさしい心はいつくしみの心を出発点としている。やさしい言葉というものには、天下の情勢を一変させてしまうほどの影響力があるということを学ぶべきである。…」

「他のために尽すということは、貴い賤しいの区分にかかわらず、多くの人々に対して、利益を与えるような方策を構ずることである。…他のために尽すという行為は、宇宙秩序の一切を包含しているのであって、〈それは〉ひろく自分に対しても他人に対しても、利益を与えるのである。…したがって自分の敵に対しても〈また〉味方に対しても、分けへだてなく恵みを与えるべきであり、自分に対しても他人に対しても、同じように利益を与えるべきである。〈そして〉もしもこの心境がわかって来ると、草木〈のような植物〉や風や雨〈のような自然現象〉に対しても、恵みを与えてやろうとする行為が、自然に〈現れて、途中で〉後退したり挫折したりすることがなくなるという基礎理論が、まさに自分自身に対して与えられるのである。」

「協調ということは、異を立てないことである。自分自身に対しても異を立てないのであり、他人に対しても異を立てないのである。…協調という事態を知るとき、自分と客観世界とは渾然一体の融合を遂げている。…協調こそは、行為を通して真理に迫っていく人々に伴う行為であり願望である〈といえる〉。〈そこでわれわれは〉ただひたすらに柔和な表情で、一切のものに対処しなければならない。」これが西嶋和夫氏の『現代語訳正法眼蔵』の抜粋である⁽⁴⁾。

現代語訳であっても、私にとっては『正法眼蔵』は難解である。難解であるが、四摂法をよく読んでみると、布施も愛語も利行も同事もす

べて、「いつくしみの心」を基にしていると思えるのである。いつくしむ心なくしては、布施も愛語も利行も同事も何一つ行うことはできない。反対に、やさしい心・いつくしむ心があればおのずと布施も愛語も利行も同事もできるのではないだろうか。こう考えると四摂法でいう四つのことは、切り離しては考えられない実是一个のことを言っているのであると思えてくるのである。一つのこととは言うまでもなく「いつくしみの心を持て」ということである。

ところで、この四摂法とは西嶋和夫の前掲書によれば「人に接するための四種類の手段…」でもある⁽⁵⁾。しかし、本当に人に対するだけのものであろうか。禅文化学院によれば、四摂法は「仏教徒に限らず人間全般に普遍的な倫理の根本となる教えを説いたものである。⁽⁶⁾」また、前述の「他のために尽くす」の中には、「草木や風や雨（原典は艸木風水）に対しても…」とある。

さらに「協調」の最後には「一切のものに対処しなければならない」とある。西嶋氏も禅文化学院も、訳と並べて原典を示されているが、この部分の原典は「一切にむかふべし」である。その訳が西嶋氏は前述のとおりであり、禅文化学院は“すべてのことに向かいなさい”と、ひととは表現していない。また、高橋賢陳著『全巻現代訳 正法眼蔵（下巻）』では「すべての人に接しなくてはならない。⁽⁷⁾」としているが、中村宗一ほか著『全訳 正法眼蔵 卷四』によれば「人々には勿論あらゆるものごとの悉くに接しなければならない。」である⁽⁸⁾。

これらを踏まえて、私なりに四摂法を解釈してみると、「人間だけでなく自然環境のすべてに対してお互いにも（物だけではなくあらゆるもの）を分かち合い、やさしい言葉をかけ合い、相手の幸せを考えながら、周りとの力を合わせて生きること。それが自分も周りのもの（者ではない、草花や鳥や蝶やすべてのもの）をも

幸せにする生き方である。」ということではないだろうかと考える。

人間だけが地球上に生きているわけでもなく、生きられるわけでもない。すべてのものに四摂法を実践してこそ人間もまた幸せになれるのである。こう解釈することが道元の真意に近づくものであると私は考える。なぜならば、道元は『正法眼蔵』巻22「仏性」において、「杭州塩官郡齊安国師^{さいあん}は馬祖下の尊宿なり。ちなみに衆にしめしていはく、一切衆生有仏性。⁽⁹⁾」と紹介して、「いはゆる一切衆生の言、すみやかに参究すべし。…いま仏道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり、心是衆なるがゆゑに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆゑに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有仏性なり。艸木国土これ心なり、心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有仏性なり。日月星辰これ心なり、心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有仏性なり。…⁽¹⁰⁾」と言っているからである。

良寛もまたそう解釈していたことが、彼の詩歌、特に短歌や俳句に鳥獸や草木を謳ったものが非常に多いことから想像できるのである。

この四摂法の教えは、修行僧のみならず、今昔の世の人々すべてに対する教えであろう。特に教育に関わる者、関わろうとする者には、必要不可欠の教えのように私には思えるのである。さらに、今日の地球規模での環境破壊や各地の紛争やテロなどの諸問題も、各国や各企業や人々が、「布施・愛語・利行・同事」のない動きをしている結果であろう。四摂法の教えは世界平和にも通ずるものであると言える。

第2節 帰郷

1791年3月、良寛の尊敬する、そして良寛の資質を認めてくれた円通寺住職大忍国仙が69歳で円寂する。そして、その後へ円通寺住職として、玄透即中和尚（後の永平寺五十世）が入る

が、この時点で良寛は円通寺境内の一角に国仙からいただいた覚樹庵を足がかりにして、諸国行脚の旅に出る。円通寺を出た理由は定かでないし、諸国行脚の足どりも、冒頭に述べた土佐の消息以外は不明である。その後、1796（寛政8）年39歳の時、良寛は18年ぶりにふるさと越後に帰る。

道元は修行僧に、ふるさとに帰ると幼い時を知る周囲の者たちが、おまえの出家前のことをあれこれ噂して、仏道の修行は出来ないから、「帰郷する莫れ」と教えている。それなのに良寛は、崇拝する道元の教えを破って、なぜ帰郷したのであろうか。

良寛の母おのぶは、良寛が円通寺で修行中の1783年4月に49歳で亡くなり、父以南は、良寛が円通寺を出て諸国行脚している間の1795年7月、60歳で京都の桂川に入水して亡くなっている。父の死は、そのころ京都で公家の儒官をしていた弟（四男）香によって良寛に知らされ、49日の法要には良寛も参列している。

良寛の帰郷は、この父の死が契機となったと各文献は言っている。帰郷のわけについて、松本市壽著『良寛という生きかた』には、あえて「莫帰郷」の教えを破り、苦しい立場に身を置くことがさらなる修行であると考えたのではないか、また、弟（二男）由之が跡を継いでいる実家を見守りたいと考えたのではないかという意味のことが書かれている。

そうかもしれない。しかし私は、それだけではなく、父の法要を契機に、矢も盾もなく強い望郷の念に駆られたのではないか、ふるさとに帰れば、遠くからでも、友人・知人の懐かしい顔を見ることができる。そういう中で暮らしたい。ああ、故郷に帰りたい。そんな思いもあったのではないかと想う。それでこそ人間であり、良寛ではないかと想像するのである。

さらに考えられることは、知らない他国での托鉢では、生命を維持するだけの喜捨も得られ

にくかったのではないかということである。良寛が円通寺を出て、諸国行脚の修行をしていた時代は、天明の飢饉（1782～87）や田沼意次の失政の後を受けて松平定信が寛政の改革（1787～93。儉約令など）を行い、1794年からはその儉約令の延長が実施されていた時代である。托鉢のお坊さんに、喜捨をしたくてもできない人々が多かった時代ではなかったかと考えるのである。

良寛が帰郷した理由はわからない。しかし、ふるさと越後に帰り、結果として周囲の人々に受け入れられたことが、良寛の“騰騰任運”の生き方を成り立たしめ、また、それによって良寛は多くの詩歌や書を残すことが出来たのではないかと思う。良寛が今日までも人々から親しまれ尊敬されるのは良寛自身の徳によることであるが、その良寛を育んだ越後の人々と風土も素晴らしいと私は思う。

第3節 五合庵

帰郷後、良寛は生家には立ち寄らず、少し離れた郷本海岸の漁師の空き小屋をねぐらとして、托鉢して歩いた。托鉢でその日の食が得られると帰り、食や衣服が余れば他のこじきや鳥獣に分け与えたという。まさに四摂法の実践である。明日のために蓄えておくということはしなかったという。われわれ凡人にはできないことである。

この頃の逸話がある。郷本の海浜で漁師の小屋を借りて住んでいたとき、小屋が火事になり、それを良寛の仕業と思った村民に生き埋めにされ掛かったという。このとき良寛は一切の弁明をせずに、ただ黙って暴行に耐えていたというのである。帰郷したときにはすでに「任運」に徹する覚悟はできていたのであろう。その後も良寛は、人に何を言われても、たとえ生命の危険にさらされても言い訳めいたことは一切口にしなかったそうである。このことは“あなた

任せ”の投げやりな考えではなく、“言い訳をしても、通じない相手には通じない。言わなくても、解る相手には解る”という考えであったらしい。

良寛の詩に、「頭髮逢々耳卓朔 袖衣なかば破れて雲烟のごとし 半酔半醒帰來の道 兒童相擁す 後ろと前と」がある。子どもとの接触が見られるので帰郷直後ではないであろうが、髪はぼうぼうで耳だけ飛び出し、僧衣はぼろぼろに破れ、まるで雲か煙のようだというのだから、良寛の風体は相当なものである。後に、親交のあった学者（亀田鵬斎）を江戸に訪ねたときも、良寛とは知らない弟子に、こじきとまちがえられて追ひ返されたというから、良寛は長くこのような風体で暮らしていたのであろう。

その後しばらくは、近辺の空き小屋を転々としていたようである。その頃の詩に「記し得たり 壮年の時 資生はなはだ艱難 ただ衣食のための故に 貧里を往還す」や「癡頑いつの日に か休まん 孤貧是れ生涯 日暮荒村の路 また空盂を掲げて帰る」などがある。帰郷しても、名主の橘屋の息子であることは誰にも言わず、誰も知らず、こじき同然の坊さんの托鉢への寄進はあまり得られなかったようである。

そのうち、小屋にある良寛の書がかつての塾の学友、橘彦山が眼にし、その筆跡から良寛にまちがいないと判定し、はじめて良寛が生家や友人や村民に知られることになったということである。そして、これも塾の学友であった原田鵬斎の周旋で五合庵に住むことになる。そして、村民にも子どもたちにも徐々に良寛が受け入れられていくのである。

さらに、経済的・社会的に地域では名のある人たちが良寛と親交を結んだり、経済的支援をするようになる。その主な人たちは、弟の橘屋山本由之、原田鵬斎、阿部定珍、山田社臯、解良叔間、そして妹おむらなどである。こうした有力な人たちが良寛と交遊し、援助することに

よって良寛の社会的存在が保障され、良寛は町や村の人から受け入れられたとも言えるのである。

しかし、支援者たちにも必要以上のものはもらわず、すでに生存中から有名でありいくらでも売れて、いくらでも金になったであろう「書」を売ることもせず、清貧に生き続けたという。道元の“…学道の人は先ずすべからく貧^{ひん}なるべし。財多ければ必ずその志を失う。…貧なるが道に親しきなり。…⁽¹¹⁾”という教えを守り通した人であると言える。

1819年の夏、長岡藩主牧野忠精が良寛を自領の寺に迎えたいと庵を訪問したときに、良寛は黙って紙に「焚くほどは風が持てくる落ち葉かな」と書いて忠精に渡したという。道元の教えどおりに、清貧を貫き通そうとする良寛をよく表す話である。

五合庵時代にはこんなエピソードがある。良寛は竹を大変好んでいたので、便所に生えてきた竹の子が素直に伸びることができるようにと、ろうそくの火で便所の屋根に穴を開けようとして、便所が火事になって焼けてしまったという。

またこんな話もある。ある時、五合庵に泥棒が入って、何も盗る物がないので良寛の寝ている布団を盗ろうとする。布団が盗りやすいように、良寛はわざと寝返りをうって泥棒に協力した。そしてそのあと作ったのが「盗人に取り残されし窓の月」という句であるという。

これらのエピソードは、良寛のやさしい心・いつくしみの心がよく出ていると思う。四摂法の実践である。ただ、逸話である。少しは美化されているかもしれない。

また、乙子神社の草庵に暮らしていた頃の逸話に次のようなものがある。秋の取り入れの忙しい時期に藩主（村上藩）の内藤信教が猟に来るというので、農家は仕事を休んで殿様の通る道の掃除をしている。百姓の難儀を見かねた良

寛は「短か日の さすかぬれぎぬ 干しあえぬ 青田のかりは 心して行け」という立て札を立てた。狩りと刈りをかけて、青田の“かり”としたのである。それを見た藩主はたちまち引き返し、二度と狩猟には来なかったという。

友人の山田社皐の家は酒造業であった。良寛は、よく山田家の勝手口で酒をねだって飲んでいたらしい。山田家の女中、およしに宛てた手紙の中に「さむくなりぬいまは蜚も光なし こ金の水をたれかたまはむ」と歌を書いている。蜚は良寛のこと、こ金の水は酒のこと（松本市壽著『良寛の生涯 その心』より）。酒もタバコも好きだったという良寛の人間らしい一面が出ていて親しめる。

これらの数々の逸話が示す良寛の生きかた、すなわち「僧としての印可」を与えられながらも“住職にならず”、またその後も修行を重ねて高い学識を持ちながらも“富貴を求めず清貧に生きる姿勢”、“権威や体制に寄らず庶民と共に生きる姿勢”、そして“あらゆるものに慈しみの心で対する姿勢”が、後の世までも多くの人々から良寛が親しまれ、愛される所以であろう。このような生きかたを良寛自身が詠った詩に次のような言葉がある。「富貴は我が事に非ず … 腹を満たせば志願たる 虚名を用って何するものぞ …」、あるいは「欲なければ一切足り 求むる有れば万事窮す …」、また「この生何に似たる所ぞ 騰騰としてかつ縁に任す … 俗に非ず沙門に非ず …」、そして「禅版蒲団把りて将^も去る 賊草堂を打す誰か敢えて禁^{とど}めん …⁽¹²⁾」などである。

木村家へ移って2年ほど経った年に、死傷者を多数出した三条地震と呼ばれる大きな地震があった。その時、山田社皐に宛てた見舞いの手紙の内容は「…災難に逢う時には、災難に逢うがよく候。死ぬる時節には、死ぬがよく候。是はこれ、災難をのがるる妙法にて候。」であった。これが地震見舞いの手紙かと思うような内

容である。

またこれとは別に、木村家のある人から「他人に気兼ねして疲れる。どうしたらよいか」と聞かれ、良寛は「人がつんとしていたら、自分もつんとしていればよい」と答えたという。問うた人はその答えを聞いてからはずいぶん気楽になったという。

どちらの話も、何か禅問答のようでもある。これらは「騰騰任運」に生きる良寛の真骨頂が出ている話ではないかと私は思うのである。

第3章 良寛と子ども

第1節 子どもとの出会い

今日、良寛と言えば、「やさしい顔で子どもと遊ぶ良寛さんの姿」を思い浮かべるのは私ひとりではないと思う。しかし、越後に帰った良寛は、最初から子どもに受け入れられたわけではなかったようである。それを表す良寛の詩がある。「至る所意になかなわす 帰り去る窮巷のほとり 昼は狂児の欺くを忍び 夜は隣家の喧しきに任す 虚室実に白を生じ 寒炉長く烟なし 己んぬるかなまた何をかいわん 万事皆因縁」あの良寛にして、子どものことを“狂児”と言っているのである。良寛は前述の身なりである。こじきとも思える見知らぬ坊さんが近頃よく歩いている。子どもたちの眼にも奇異に映ったであろう。しかも良寛は誰に対しても怒った顔を見せたことがないという。子どもたちも最初はちょっとはおそろおそろからかってみる。ところがこのおじさんは少しも怒らない。それに安心した子どもたちは良寛をからかいにからかったのであろう。時には石も投げたかも知れない。

私が子どもだった昭和30年頃までは、まだこじきがいた。一人、町内の橋の下に住みついていた人がいて、この人が何をしても何を言っても怒らない。今でも名前を覚えているそのこじ

きを、私は近所の仲間たちとよくからかったものである。今から思えば悪いことをしたと思うが、子どもとはそんなものではないだろうか。まだいろんなことがよくわからないために、子どもの行為は結構残酷な場合もある。

とにかく、良寛と子どもの最初の出会いはこんな風であったようである。その後、次第に良寛が大人たちから信用されるようになっていくことと並行して、子どもたちも良寛をからかわないように、徐々に一緒に遊ぶようになっていったのであろう。その裏では、良寛を理解し始めた親たちが、子どもに良寛のことを話したり、いたずらを諫める働きもしたであろう。

また、「十字街頭食を乞い了り 八幡宮迎まきに徘徊す 児童相見て共に相語る 去年の痴僧今又来る」という詩も残している。この詩は、五合庵時代、長い冬を過ごして久しぶりに町に降りてきたときのことでであるとされている。良寛が最初に五合庵に入ったのは1797年40歳の秋であるというから、この詩が1798年春のことであると仮定して、これは帰郷して二年後のことである。

これは良寛と子どもたちとの交歓風景であると解釈する文献もある⁽¹⁾。それが正しいのかも知れない。しかし、私には、相見て相語るという様子と痴僧・又来るという字句から、子どもと良寛が交歓しているとはイメージできない。どうしても、いたずら小僧たちがひそひそと、「おいあの坊主がまた来たぞ、どうする、またいじめてやるか」「でもおっかあが、あのお坊さんは偉い人なんだから、もう悪さをしたらいけん言うたよ」などと話している様子しか目に浮かんで来ない。間違っているのかも知れないが、前述のからかわれていた頃と、後に完全に子どもに溶け込む、その中間辺りの時期の詩のように受け取れるのである。

詩の解釈や作詩時期の推定が正しいという自信はないが、いずれにしても、子どもたちと良

寛がすっかり仲良しになるまでには、かなり長い期間を要したであろうことはまちがいないのではなからうか。

第2節 遊び

子どもと遊ぶことは、良寛にとってどのような意味をもつことであったのであろうか。〈良寛と子どもとの関わり〉を示す逸話に、「良寛さま一貫」というのがある。地藏堂の町で子どもたちが「良寛さま一貫」と良寛に声をかける。良寛は驚いて後ろへそっくり返る。それを見て子どもたちは喜んで「良寛さま二貫」と叫ぶ。良寛はもっと反り返る。子どもたちはますます面白がって「良寛さま三貫」「良寛さま四貫」……と続けて、「良寛さま十貫」となると良寛はひっくり返ってしまい、それをまた子どもたちは大喜びするという話である。

これはある時、地藏堂の町で魚か何かの競り売りがあって、そこにいた良寛が、ある品物が「一貫」と非常に高いのに驚いて身を反らした。これを見ていた町の子どもたちが、その時の良寛の格好が面白いと、良寛に逢うたびに、一貫、二貫と声をかけ、良寛もそれに応えたというのである。

この逸話について、次のような話が『良寛禅師奇話』に書かれていると多くの文献が伝えている。それは、ある時、解良叔問の家を訪ねた良寛がそこで地藏堂の人に会ったので、「お前の村の子どもたちは、たちが悪い。一貫、二貫と言ってわしを反り返らせるが、わしもしんどいからやめさせてくれ」と言ったという。これをそばで聞いていた叔問の息子、栄重（『良寛禅師奇話』の著者）が、「どうしてしんどいのに相手をなさるのですか。あなたが相手をしなければいいのに」と尋ねたところ、良寛は「始めてしまったものはやめようがない」と答えたというのである。

同じパターンの逸話に「半兵衛」がある。解

良叔問が庄屋をしていた牧ヶ花の村で、托鉢していると少年たちが「半兵衛の家だぞ」と叫ぶ。すると良寛は足音をひそませ、あわてふためいてその家を去る。子どもたちにはその良寛の様子面白いから、良寛が次の家へ行くと、また「半兵衛の家だぞ」と声をかける。良寛はまた逃げる、というものである。

これは、良寛が托鉢中に半兵衛という者にひどくこらしめられたことがあって、それからというもの、良寛は半兵衛という名前を怖れていた。それを知って、最初は大人が「半兵衛の家だぞ」とからかっていたものを、いつしか子どもが遊びにするようになったものだという。（注、この「半兵衛」の話は、文献によって良寛が半兵衛を怖れるようになった理由が異なるし、子どもが登場しないものもある。）

また、これらと全く同じ形で、子どもたちが「ねずみ、ねずみ」と良寛に声をかけると、驚いた良寛が顔をそむけるという話もある。すべて同じ類の話である。これらの話は何を伝えようとしているのであろうか。

最近、私の三歳半の外孫が遊びに来て、帰る時、車の中から私に握手を求めて、握った手をいつまでも離さない。その時に困った顔や動きをする私の様子が面白くてたまらないようで、帰る時には毎回握手である。そしてそれはすでに遊びとなっている。

子どもが望むことを与え、共に楽しんでやることは、布施であり利行であり同事である。そしてそのとき互いが発する言葉は愛語である。

子どもと遊んだ良寛と現在の私はほぼ同じ歳である。いくら子どもが好きでも、子どもと遊ぶことがいくら楽しくても、飽くことと疲れを知らない子どもと遊ぶのは疲れるものである。しかし、良寛は疲れた様子を見せず、やさしい顔を絶やさずに、遊びの展開に身を任せて、子どもたちと遊んだのであろう。

それは、四摂法の実践、つまり良寛にとって

は修行の一つでもあったのではないだろうか。そして、修行であることが良寛自身にも遊びを楽しませる要因となったのではなかろうか。『正法眼蔵』95巻本の30番目に「行持^{ぎょうじ}」の巻がある。行持とは禅文化学院によれば「持続的行為」⁽²⁾であり、西嶋和夫氏は「行持とは、梵行持戒、すなわち清浄な行為と戒律の保持を省略した言葉と解される⁽³⁾」としている。

「仏道には必ず無上の行持があって、めぐりめぐって断絶することがない。発心、修行、悟り、安らぎと、暫くの間もなく、行持はめぐりめぐっている。…今この時に悟りを開き、悟りを脱落するのは、行持の働きである。…従って行持は、暫くも怠ってはならないのである。⁽⁴⁾」修行を積んで一度悟りを開けばそれで完結して、いつまでも悟りの状態を維持できるというものではないのである。

つまり、「行持」すなわち修行の継続こそが仏道を歩むということであると言える。良寛は生涯、この「行持＝修行」を怠らず、清浄な行為と戒律を保持して、仏道に生きた人である。

〈子どもたちと良寛の遊び〉は、お互いの四摂法の実践である。良寛にとって子どもとの遊びは楽しいものだったと思われるが、ただ楽しいだけではなく四摂法の実践、すなわち修行であり行持であったのだと私は考える。

そもそも遊びというものは楽しいものである。その楽しい行為の中に実は四摂法の要素である「布施・愛語・利行・同事」の四つがすべて含まれているのである。逆に言うと、この四要素がすべて含まれないと遊びは成立しないし、楽しいものではなくなる。

今、良寛が子どもたちとよく遊んだ「手毬つき」を例にとって考えてみよう。良寛が子どもに毬を貸したり、あるいは与えたりする。子どもはうれしそうな笑顔で良寛に返す。これはお互いの「布施」である。そして、順番を待っている良寛（あるいは子ども）は、毬つきのリズム

ムが整うように、手拍子を打ったり歌を唄う。毬をつく子ども（あるいは良寛）は歌に合わせて毬をつく。これは「利行」と言える。このようにして毬をつく者も毬つきの歌を唄う者も気持ちを一つにして、みんなで毬つきを楽しむ（同事）。毬つきという遊びの中で励ましたり、誉めたり、あるいはうまくつけた、うまく歌えたと歓声を上げるが、これは「愛語」である。遊びには四つがすべて含まれているのである。つまり、遊びにはお互いを思いやり、いつくしむ心が必要であり、それがあるからこそ遊びという行為が楽しいのである。

日常生活の中で、遊び以外に四摂法がすべて同時に含まれる行為が他にそれほど多くあるだろうか。布施だけであったり、愛語だけであったり場面の方が多いのではないだろうか。

良寛ほどの人である。我々凡人のように強く意識しなくても、かなり自然に四摂法を実践できたはずである。しかし、前述の“行持の教え”がある。修行の一つである四摂法も絶えず継続していなければならない。その修行の継続が、遊びという楽しい行為によって出来るのである。しかも遊びにおいては四摂法の四つの要素がすべて含まれるのである。

このようなことから、良寛にとって子どもたちとの遊びは修行でもあったと考えられるのである。そして、子どもたちと楽しく遊びながら修行が出来るという喜び。子どもたちに遊びを通して自然に「四摂法」の精神を伝えることが出来るという喜び。良寛にとっては、この二つの喜びが遊びをさらに楽しいものにさせたのではないかと私は考える。

一方の子どもたちであるが、子どもたちは良寛と遊ぶのが楽しいからただ遊んでいるだけである。もちろん四摂法だの修行だのといった意識があるはずもない。ところが子どもたちは遊びにおいて、知らず識らずのうちに「四摂法」を実践するのである。良寛は子どもたちに四摂

法を実践する。同時に子どもたちからも良寛は四摂法を受ける。子どもたちとの遊びは、良寛にとってこの上ない修行であり、またこの上なくうれしく楽しいものであったことであろうと私は考える。子どもと遊ぶ良寛は、さぞいきいきとしていたことであろうと想う。

次に、子どもたちに対する良寛の姿勢を見てみたい。その一端は前述の逸話「良寛さま一貫」からも窺い知ることが出来る。解良栄重に対する良寛の返事は「始めてしまったものはやめようがない」であった。これは良寛が、相手が子どもだからといって侮らず、一人ひとりの人間としてその人格を認めている証であり、また、ものごとに対する良寛の一貫性の現れでもあると、私には考えられるのである。前述の他の逸話も同じである。これらの逸話は良寛のこうした姿勢を伝えたかったのであろう。

さらに、子どもに対する姿勢を表している良寛の漢詩に、次のようなものがある。「青陽二月の初め 物色やや新鮮なり この時鉢盂を持し 得々として市てんに遊ぶ 兒童たちまち我を見 欣然として相ひきいて来る 我を要す寺門の前 我を携え歩遅々たり 盂を白石の上に放ち 囊を緑樹の枝に掛く ここに百草を闘わせ ここに毬子きゅうしを打つ 我打てばかれしばらく歌い 我歌えばかれ之を打つ うち去り又打ち来て 時節の移るを知らず …⁽⁵⁾」。また、「裙子短く褌衫長し 騰々兀々只麼しもに過ぐ 陌上はくじょうの兒童たちまち我を見 手を拍ひちうてうて 唱う 放毬にちの歌」や「日々々々又日々 のどかに兒童を伴ってこの身を送る 袖裏の毬子しゅうり两三箇 無能飽醉す太平の春…」そして「また兒童と百草を闘わす 闘い去り闘い来たうたうた風流日暮れて寥々たり人帰って後 一輪の名月素秋を凌ぐ」などである。

もうこの頃は、子どもたちと良寛はすっかりと打ち解けた仲間同士である。子どもたちは良寛を見ればわっとばかりに駆け集まり、托鉢中

であろうとなかろうと良寛はそれに応える。明るい笑い声が聞こえるような詩である。

これらの詩や先に述べた逸話などから見える〈良寛と子どもの遊び〉は、その遊びの内容・場所・時間・人数・ルールなどといったものを、決して良寛が決めたり、押しつけたりしていない。子どもたちの決めた遊びと、その環境に良寛が入って行き、やさしく相手をしているのである。だからこそ、子どもたちは良寛と遊ぶのが楽しく、良寛もまた、子どもたちと遊ぶことを喜びとしていると言えるのである。それだけに別れた後は寂しいのであろう。

ここにも、もちろん四摂法があることは前述のとおりである。また騰騰=ものごとにこだわらない、しかし、兀兀=絶えず、りちぎにつとめる、良寛の姿勢が現れている。兀兀とは、一貫性があることであると言うこともできよう。今日は子どもたちと遊んだが明日は遊ばないとか、昨日は何を言っても笑っていたのに、同じことを言っても今日はよく怒るでは、子どもたちはついてこないであろう。

第3節 良寛の児童観・教育観

良寛書を読み進む過程で、しばしば佛教大学で学んだ「保育方法論」や「幼児教育課程論」が頭に浮かんで来た。もちろん私の印象に強く残っているところの、「環境を通して…」・「遊びを通して…」・「あるがままの…」・「子どもが遊んでいるところへ出かけて…」・「のびやかさ」・「のどかさ」・「経験主義教育観」・「いきいきしさ」・「一人の尊厳」・「今、その時を…」と言った程度の断片的な語句でしかないが。そして思ったことは、良寛と子どもとの関わりの中には、およそこれらのことがらはすべて入っているのではないか、ならば、「良寛は日本における幼児教育の先駆者ではないか」ということである。

良寛は、「戒語」というものを創っている。

それは、人の言動を戒めるもので、その数は300余あるという。その内容は、たとえば、「ことばの多き」、「とわず語り」、「鼻であしらう」、「はやくち」、「はなしの腰をおる」、「おのが悪しきこと人にぬりつける」、「みだりに約束する」、「はやりことば」と言ったようなものである。最初は良寛が自分のために書きはじめたものが、人の求めに応じて書き加えるうちにその数も多くなったということである。

戒語はすべて教育に関わると言えるが、その中で、直接子どもに関するものとして「子どものこしゃくなる」がある。くそ生意気な大人のような子どもに育てるなということであろう。子どもは子どもらしく純真であることがよい。換言すれば、その子どもの、その歳に合った育て方をしてくださいよ、と言っていると解釈してもよいと考える。

もう一つ、「子どもをたらかしてすかしてなぐさむ⁽⁶⁾」がある。うそをついて子どもをたぶらかしたり、ご機嫌を取ったりして、もてあそんではいけないと言っている。これは子どもに「うそ」というものを教えることにもなる。おだてることとほめることを勘違いしないことも大切である。おだてることは子どもを誤らせる。うそをつく気はなくても、親は忙しいとき、ついこの戒語に反する言動をし勝ちである。心しなければならぬと思う。

この二つの戒語は、親は子どもを一人の人格のある人間として認めて、真剣に向き合うことが、子どもの成長にとって大切なことであると教えている。つまり、良寛は子どもを一人の人間として観ているのである。そのことは戒語だけでなく、彼の残した多くの詩歌や逸話からも言えることである。だからこそ、親に向けてこういう戒語が発せられるのである。また戒語から、子どもが子どもらしくまっすぐに伸びていくことを良寛が願っていることも読みとることができる。

また良寛は、歌でも教育に関して次のようなものを残している。

「人の身はならはしものぞ子供らをよく教へてよねざらひまして」

「人の身はならはしものぞことさらによく教へてよさきくいまして」

この二首は、人は慣わしによってつくられるもの、つまり習慣いかんによる。だから子どもの教育は大切なものであると言っている。ただし、子どもの教育に当たっては、最初の歌では、ねざらいの心、つまりいたわりいつくしみながら教えてやってください、と言っている。二番目の、さきくいましての「さきく」を『広辞苑』でひくと、「さいわいに。無事に。変わりなく。」とある。これは、おだやかに教えてくださいと言っているのであろうか。二首の末尾の句を併せて考えると、がみがみと一方的に押しつける教育ではだめである。子どもの気持ちや体調やレディネスや理解の程度などにも、よく気を遣って教育をしなさい、であろうと思う。

もう一首、「教えとは誰が名づけけんしら糸の賤^{しず}がをだまきまきもどし見よ」がある。「をだまき」とは「おだまき＝苧環」のこと。苧環を『広辞苑』でみると、「①つむいだ麻糸を、中が空洞になるように円く巻きつけたもの。」とある。私は実物の苧環を使ったことも見たこともないが、中が空洞ということは、相当柔らかくふんわりと巻いた物であろう。ということは、苧環の糸を巻き戻す際に強引あるいは性急に巻き戻そうとすると、苧環の特性（中が空洞の環状形）が壊れて、糸がもつれて巻き戻すことが出来なくなることが考えられる。もつれないように、環状形を壊さない程度にゆっくりと優しく巻き戻すことが苧環の糸を使う際のポイントであろう。

この歌で良寛は「教え」とは誰が名付けたものか知らないが、教えよう教えようとする前に、まずは苧環を巻き戻してみなさい。「教え

とはどうあるべきものなのか」がよく解るでしょう。”と言っているのではないか。つまり、“苧環を巻き戻すのと同じように、順序立てて、しかも優しく、子どもの理解の程度に合わせて教えることが大切である”と良寛は言っているのだと私はこの歌を解釈する。これは言い換えれば“発達に即した教育をしなさい”ということである。

これらの歌から窺える良寛の考え方は、現代の幼児・児童教育と同じ考え方であると言える。

さて、良寛には、子どもと遊ぶとき、子どもに対する教育的意図があったのかどうか、それを研究することも今回のテーマの一つである。結論的に言えば“良寛には子どもに対する教育的意図があったのだ”と考えられる。

ここでいう教育とは、^{ひふみよいむな}一二三四五六七と子どもに数を教えることではない。良寛が得意な字(書)を教えることでもない。数や字も、子どもたちから求められれば教えたであろう。それは容易に想像できる。しかし、良寛が子どもたちに教えたかったのは、そういう形のあるものではなく、“人の幸せとは何か”ということを知ったのだ。そして人が幸せに暮らすためには、自他の“すべてのものをいつくしむところ”をもつことが必要であると伝えたかったのだ。これが良寛を研究して私が得た結論である。

ただし、人の幸せ・いつくしみの心を子どもたちに教え、伝えるために、それを直接に取り上げて話して聞かせたり、ものを書いて読ませたり、読んで聞かせるというような、目に見える手段は取らなかった。だまって、ただ黙々と、しかし楽しく子どもたちと一緒に遊ぶなかで、子どもたち自らが、それを感じ取ってくれるのを待ったのである。これが良寛の教育観でもある。

次に、今一つの研究テーマである良寛の児童

観である。すでに何回も述べたが、良寛は、人格あるひとりの人間として子どもを観ていた。昭和26年に宣言された「児童憲章」で“児童は、人として尊ばれる”と謳われている。今日ではこれは当たり前だが、良寛が生きたのは江戸時代である。士・農・工・商、さらにその下に非人という厳しい身分制度の中で、大人でさえ人間が人間として認められなかった時代である。そのような時代に、良寛は子どもを人として、その尊厳を認めていたのである。実にすごいことである。そして子どもを育てる親の責任も認めていることは、すでに述べたとおりである。

また良寛が、子どもは成長過程にある人間であるということをはっきりと認識し、その成長の段階に応じた教育をすることが大切であると考えていたことも、前述の短歌から読みとることができるのである。

良寛の児童観は、「子どもは、日々成長する存在である、そして人格をもったひとりの人間である」という見方である。

おわりに

前述したように、道元は『正法眼蔵』の「行持」の巻で、“悟りとは修行を続けることである”と教えている。修行とは、人間とはどうあるべきものか、どう生きるべきものなのかを追い求めることである。良寛は生涯修行を続けた人である。

私は思う。良寛の修行のベースは玉島の円通寺で培われた。しかし、真の修行は越後に帰ってから始まったのではないかと。そのなかでも良寛が最も大切にしていた修行の場が、「子どもたちとの遊び」ではなかったかと考えるのである。

直接子どもに何かを教えるということはしなかったけれども、四摂法に生きようとする良寛

の姿は、子どもたちに喜びと同時に、よい影響を与えたはずである。そしてまた、良寛もその修行の場で、子どもたちから更なる修行の力と生命力を与えられたはずである。

「良寛と子ども」を卒業論文のテーマに取り上げたものの、実は良寛について何も知らなかった。とにかく良寛とはどんな人なのか、その全体像を大まかに理解するところから始めようと文献を読み始めたところ、どっぴりと「良寛の世界」へ引き込まれ、次から次へと読みたい気持ちになった。すっかり良寛の魅力の虜になったわけである。

特に魅力を感じたのは、「騰々任運」である。「とうとうにうん」という音は、それだけでその言葉の意味を表しているような気持ちのよい響きがある。そしてまた「騰騰任運」は良寛自身の生き方であると同時に、良寛が子どもたちや周囲の人たちに接する態度でもあったと思う。特に、そのように接してもらった子どもたちは幸せであったと思うのである。

良寛を理解することはまだまだ出来ていないし、彼の児童観・教育観の理解についても同様である。しかし、卒業論文のテーマに良寛を選んだことで、「良寛さん」と出会えたことはありがたいことだと思っている。「これもなにかの縁」であろう。これからも「良寛さん」とおつきあいをしたいと考えている。

【第1章 注記】

(1) 五合庵は国上山くがみやまの中腹にある真言宗国上寺こくじょうじから少し下ったところにある。もともと国上寺住職の隠居所として建てられたものである。その空いた時期を良寛が利用させてもらったのである。

私も実際に訪ねてみた。国上寺から五合庵へ通じる道は、国上寺へのかつての西参道の一部でもあるが、大変に急な坂道である。その急峻さからすると、雪はおろか雨でも道が滑って五合庵からの出入りは出来なかったのではないかと思われる。現在、路面には滑り止めの横棧が埋められ、路端には手すりてすりが付けられている。

- (2) 松本市壽『良寛という生きかた』中央公論新社、2003年、29頁。
- (3) 新村 出編『広辞苑』第三版、岩波書店、1983年、参照。
- (4) 松本市壽『良寛の生涯 その心』考古堂書店、2003年、56頁。
- (5) 松本市壽『良寛の生涯 その心』考古堂書店、2003年、56頁、安藤英男『良寛 逸話でつづる生涯』鈴木出版、昭和61年、52頁、松原哲明『良寛のこころ』PHP出版、1991年、40-41頁を参照。
- (6) 石田吉貞『良寛 その全貌と原像』塙書房、1975年、292頁。
- (7) 石田吉貞『良寛 その全貌と原像』塙書房、1975年、292-293頁、有福孝岳『『正法眼蔵』に親しむ』学生社、1991年、71-85頁、中村宗一『良寛の偈と正法眼蔵』誠信書房、昭和59年、9頁を参照。

【第2章 注記】

- (1) 禅文化学院『正法眼蔵』誠信書房、昭和43年、226頁によると、『正法眼蔵』には、95巻本、84巻本、83巻本、75巻本、60巻本、28巻本、12巻本がある。ここで巻45としているのは、95巻本の45番目に「四摂法」があるということである。
- (2) 西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵 第七巻』金沢文庫、昭和52年、86頁。
- (3) 前掲書、72頁。
- (4) 前掲書、75-85頁。引用文の中に〈 〉で括られた字句があるが、これについて同書凡例欄へ「四、逐語訳の途中で文脈の都合上、原典になり字句を補わなければならない場合は、その字句を〈 〉でくくった。」と説明がある
- (5) 前掲書、71頁。
- (6) 禅文化学院『正法眼蔵』昭和43年、236頁。
- (7) 高橋賢陳『全巻現代訳 正法眼蔵(下巻)』理想社、昭和47年、600頁。
- (8) 中村宗一ほか訳『全訳 正法眼蔵 巻四』誠信書房、昭和47年、370頁。
- (9) 西嶋和夫『現代語訳 正法眼蔵 第四巻』金沢文庫、昭和50年、62頁。
- (10) 前掲書、62頁。
- (11) 水野弥穂子訳『正法眼蔵随聞記』筑摩書房、昭和38年、169頁を参照。
- (12) 中村宗一『良寛の偈と正法眼蔵』誠信書房、昭和59年、163頁によると、「禪版 倚板ともいう。

座禅の時、疲れた時、身を倚せる板。蒲団 坐蒲、座禅の時、尻に敷く円坐。または寝具。」である。また、広辞苑によると、禅板は「禅僧が座禅に用いる長さ50センチメートルほどの板。…」である。

【第3章 注記】

- (1) 井上慶隆『良寛』研文出版、2002年、137頁を参照。
- (2) 禅文化学院『正法眼蔵』誠信書房、昭和43年、134頁。
- (3) 西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵 第五巻』金沢文庫、昭和50年、113頁。
- (4) 禅文化学院『正法眼蔵』誠信書房、昭和43年、134-137頁。
- (5) “百草を闘わす”とは、入矢義高『良寛 詩集』講談社、1994年、238頁に「草の試合 闘草とは、もとは中国で端午の日に種種の草を取り合わせて優劣をきそった遊び。『闘百草』という歌謡もある。ここはオオバコの茎などをからませて引っ張り合う遊びであろう。古風な『草合わせ』ではない。」とある。
また、東郷豊治『良寛詩集』創元社、昭和40年、15頁に「…草ずもうをたたかわせ、…」とあるから、オオバコの茎をからませて引き切った方が勝ちとする遊びと解釈してまちがいないであろう。
- (6) 『広辞苑』によると「なぐさむ」は、「①気をまぎらす。憂さをはらす。②もてあそぶ。からかう。③（略）」とある。ここでは②と解釈するのが適切と考える。

【参考文献】

- ・安藤英男『良寛 逸話でつづる生涯』鈴木出版、昭和61年
- ・有福孝岳『『正法眼蔵』に親しむ』学生社、1991年
- ・飯田利行『定本 良寛詩集譯』名著出版、1989年
- ・池田魯参『現代語訳 正法眼蔵随聞記』大蔵出版、1993年
- ・石田吉貞『良寛 その全貌と原像』壇書房、1975年
- ・磯部欣三『良寛の母 おのぶ』恒文社、昭和61年
- ・井上慶隆『良寛』研文出版、2002年
- ・入矢義高『良寛 詩集』講談社、1994年
- ・大島花束校注『校註良寛和歌集』岩波書店、昭和8年
- ・大西正倫編著『幼児教育課程総論 補充資料〔改訂

版〕』佛教大学通信教育部、2000年

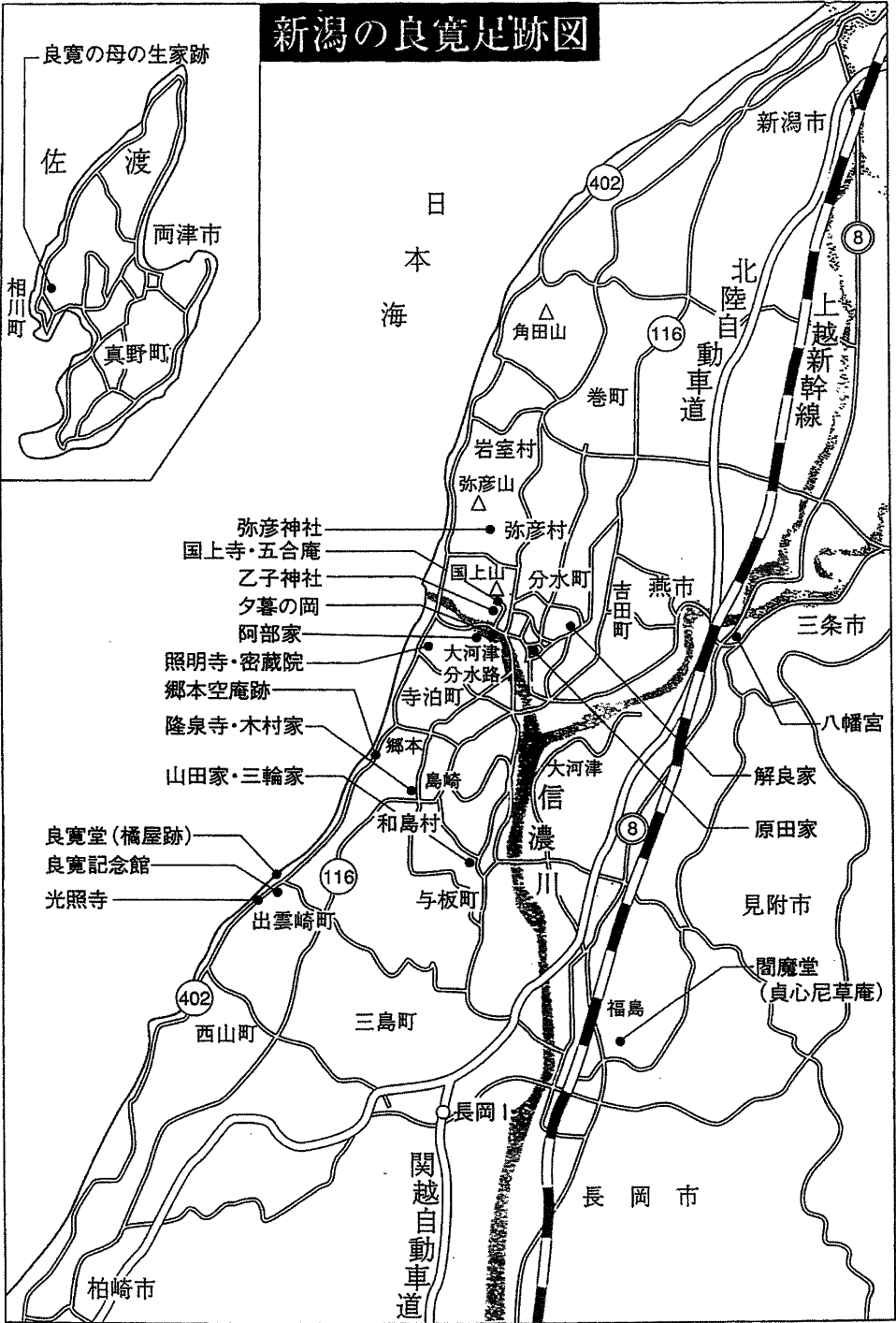
- ・大宮季貞編『沙門良寛和歌集』警醒社書店、明治41年
- ・鹿兒島徳治『良寛の手毬と鉢の子』文化書房博文社、昭和56年
- ・岸井勇雄『幼児教育課程総論』第二版、同文書院、1999年
- ・北川省一『良寛と子どもたち 親と教師のために』現代企画室、1988年
- ・北川省一『良寛遊戯』アデイン書房、昭和52年
- ・境野勝悟『道元と良寛に学ぶ人間学』致知出版社、平成10年
- ・佐藤吉太郎『良寛の父 橘 以南』第一書房、昭和10年
- ・下程勇吉監修『新版教育学小事典』法律文化社、1976年
- ・新村 出編『広辞苑』第三版、岩波書店、1983年
- ・禅文化学院『正法眼蔵』誠信書房、昭和43年
- ・高橋庄次『手毬つく良寛』春秋社、平成9年
- ・高橋 司編著『保育方法論』佛教大学通信教育部、1997年
- ・高橋賢陳まさのぶ『全巻現代訳 正法眼蔵（上巻）』理想社、昭和46年
- ・高橋賢陳『全巻現代訳 正法眼蔵（下巻）』理想社、昭和47年
- ・武田鏡村編『良寛のすべて』新人物往来社、1995年
- ・田中圭一『良寛 その出家の実相』三一書房、1986年
- ・谷川敏朗『良寛の愛語・戒語』考古堂書店、2000年
- ・中央法規出版編集部編『新版社会福祉用語辞典』中央法規、平成13年
- ・東郷豊治『良寛詩集』創元社、昭和37年
- ・中野孝次『風の良寛』集英社、2000年
- ・中村宗一『良寛の偈と正法眼蔵』誠信書房、昭和59年
- ・中村宗一ほか訳『全訳 正法眼蔵 卷一』誠信書房、昭和46年
- ・中村宗一ほか訳『全訳 正法眼蔵 卷四』誠信書房、昭和47年
- ・中本 環『良寛のころ』KTC中央出版、1996年
- ・新潟県教育委員会ほか編『良寛のころ』新潟県教育委員会・全国良寛会、昭和58年
- ・西尾実『正法眼蔵辨道話他・正法眼蔵随聞記』筑摩書房、昭和37年
- ・西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵 第4巻』金沢文庫、

昭和50年

- ・西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵 第5巻』金沢文庫、昭和50年
- ・西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵 第7巻』金沢文庫、昭和61年
- ・野崎守英ほか『良寛学入門』名著刊行会、昭和55年
- ・ひろさちや原作・巴里夫漫画『良寛さん』鈴木出版、1993年
- ・松原哲明『良寛のころ』PHP研究所、1991年
- ・松本市壽『良寛の生涯 その心』考古堂書店、2003年
- ・松本市壽『良寛という生きかた』中央公論新社、2003年
- ・水野弥穂子訳『正法眼蔵随聞記』筑摩書房、昭和38年
- ・吉野秀男『良寛 歌と生涯』筑摩書房、1975年
- ・吉本隆明『良寛』春秋社、1992年
- ・「良寛」編集委員会編『良寛 第14号』考古堂書店、昭和63年
- ・渡辺秀英『良寛出家考』考古堂書店、1974年

【参考資料・その他】

- ・アニメーション映画 案納正美監督『良寛さん』『良寛さん』制作委員会、2003年
- ・新聞『仏子だより第32号』玉島浅口仏教檀信徒連合会、平成15年



(注) 松本市壽『良寛の生涯 その心』考古堂書店、2003年、233頁を引用。